

ヨハンナ・スピーリ著
薔薇の乙女

小池辰雄訳

東京 新教出版社 刊行

Meinem Bruder
im Himmel!

ROSEN-RESLI

zu Weihnachten 1946.

Tatsumi.

薔
薇
の
乙
女

ヨハンナ・スピリー原作
小池辰雄譯

新
教
出
版
社

Erzählung für Jung und Alt

Western Union

in Western Union

in Western Union

London

まへがき

「太平洋戦争」の荒浪が鎮つて、おのれを深淵に發見した一九四五年は日本歴史に於ける最も深い年でありませう。その年を見送つて私達は今新しい年を迎へました。が併し本當に新しい希望を獲て出發してゐるでせうか。

私達日本人が本當の希望を抱き得るためには、先づ自分が深淵に在ることを深く知らなければなりません。舊約聖書の詩篇第百二篇に「汝我れを擡げて投げ棄て給へり」と告白してゐる句があります。神様が私達をそのいろいろな罪のため、「投げ棄て給うた」ことを知ることが、希望への第一關門なのです。

また同じく詩篇の第百三十篇に「嗚呼神よ、我れ深き淵より汝を呼ぶ」といふ祈りがあります。私達が深淵から先づ求むべきものは、この聲のやうに神様を措いて外にないのであります。晨に起き出でて神を呼び、神を相手に眞晝間

を力一杯生き、神に信頼して眠りに就く生活、——それは最も單純で最も力強い生活であり、最も冒險で最も平安な生活であり、窮乏の中にあるとも心豊かな生活であります。斯ういふ消息に就いてこの物語は我々に何らかの光を投ずるであります。

日本が所謂第何等国であらうとも、今までのやうな空疎と虚偽の信心や、拜金拜物の情ない根性をかなぐり棄てて、眞の神を有つことに於て世界の第一等国に日本が成ること、これが譯者の念願であります。

西の麗しい山岳の國に人と成つたスピリーの信仰が薔薇の如きものであつたとするならば、願はくは東亞なる島根の子女らよ、まづおのが信仰をして野の千草の如く花咲かしめ、この荒みたる世を美しくしませんか！

この物語の原文は曩の「神はわが友」と同じ書中に在るもので、同じく松田智雄氏の深き御好意によります。拙譯ながら、なほ續刊さるべきスピリーの作品の紹介は、謂はば松田兄と私から、新日本の家庭へおくる小さき贈物であり、

熱き祈りであります。

一九四六年一月中旬

雪明き夜 狐禪寺の村里にて

譯者 識

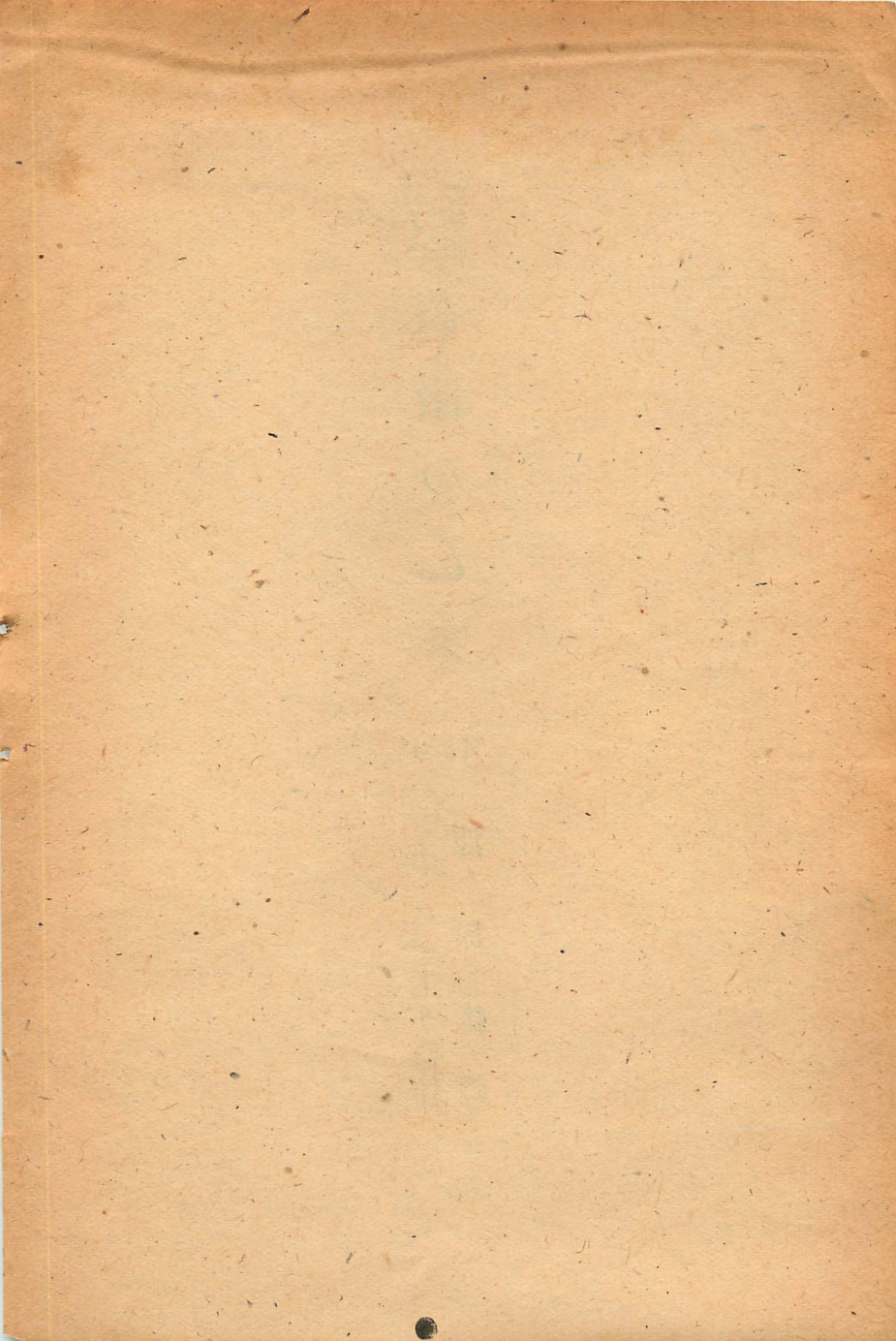
目次

まへがき	三
一 薔薇の花咲く季節に	九
二 小さな助け手の大きな手助け	一九
三 ローゼンレスリーの憂ひ	三三
四 「 ソルゲンムツテル 憂ひの母」の解消	四四
あとがき	四四

親子へ
の物語

薔
薇
の
乙
女

ヨハンナ・スピリー原作
小池 辰雄 譯



一 薔薇の花咲く季節に

ディルドバツハの村役人をしてゐたディートリツヒと云ふ人は、もとは相當な地所を有つてゐましたが、二三年前から大變零落れて、職も収入も失つてしまひました。今は其處此處に在る自分の未墾の畑地から少し許りの牧草を刈り集めて來ることが唯一の仕事となりました。それは瘠せた山羊の飼料にするためなのです。彼はといへば、自分と養女の爲に僅かばかりの馬鈴薯とすこしの牛乳があるきりなのです。晝食が濟むと、ディートリツヒは何處かへ行つてしまひます。そして夕方になつて始めて山羊の乳を搾りに出て來るのです。そのあとは再た自宅には居りません。でも、村人達は彼が夜晩くまで宿屋に居ることや、自分の借金を支拂ふために、間もなく家屋も畑地も山羊も手離さねばならないといふことなどを知つてゐました。妻の在世中は、すべてがもつと善

く行つてゐました。二人は原野も多く有つてゐましたし、牝牛も一頭もつてゐたのでした。妻は朝夙くから夜晩くまで忠實に働きました。二人の間には自分の兒といふものがありませんでしたので、三年程前からディートリツヒの妹の遺^{わすれがたみ}兒と一緒に暮してゐました。丁度一年前に妻が亡くなり、それ以來といふものは暮し向はどんどん悪くなりました。村人達は、ディートリツヒの餘りにも慘めになつたのにひきかへて、その兒の鮮かな萌えるやうな容貌を不思議に思はないわけにはゆきませんでした。

この兒は今年八歳で、どこへ行つても唯だローゼンレスリー（ばらのレスリー）とのみ稱ばれてゐました。といふのは、この兒はいつも薔薇の小花を手に持つか、口に銜^{くは}へるか、胸に挿^さすかしてゐたからでした。レスリー——テレ——が本當の名でありましたが——は薔薇の花が大好きで、何處の庭であらうと薔薇さへ咲いて居れば、嬉しさを碧い眼で飽かず眺めてゐますので、しまひにはその庭園^にの人達が「一つあげようか」と呼びかけてくれるのでした。す

ると、ローゼンレスリーは眼を欣びに輝かせて小さな手を四目垣からさし伸べ、御禮を云ひ乍ら大好きな花を受けとるのでありました。薔薇が咲きさへすれば、いつもこの兒は薔薇を身につけてゐました。誰も彼も花咲くローゼンレスリーを知つてをり、彼女を愛しました。レスリーは叔父さんとはそんなに會ひません。彼女は、朝は學校に行きますし、晝御飯の時にはデパートリッヒは大抵斯う言ふのでした、「俺は夕方家へ歸らないよ。何か食べるものがまだキットあるだらうよ」と。けれども戸棚はいつも空っぽでした。でも宜いことには、學校で子供らがローゼンレスリーに林檎や梨をくれたり、パンを一かけくれたりしました。時たま空腹を抱へてゐることがあつても、あちこちと薔薇の花咲く庭園へ氣輕に驅けて行き、幾つかの薔薇をもらふのがつねでした。その嬉しさで他のすべての事を忘れました。

今日も亦、この兒は夕食を攝りませんでした。野原を越えて楽しさうに跳

び歩きました。それは輝かしい夏の夕方でありました。蝶々は碧い空を舞ひ昇り舞ひ降りてゐました。雲雀は空高く輪を描いて飛び廻り、囀る聲も夏らしく聞えました。野原では其處此處に蟋蟀がいかにも愉しげに啼くので、ローゼンレスリーも愈々楽しくなり、愈々高く跳びはね、まるで蝶々と一緒に羽をつけて天に昇らうとするかの様でした。間もなく、彼女はこんもりした森の見える丘に接したいつも一番美しい薔薇の咲いてゐる庭園のすみに辿り着きました。この庭は木で組んだ垣で囲まれてゐましたので、ローゼンレスリーは木の四つ目垣の下の子三段に速くも攀ぢ登り、美ましさに庭を眺めるのでした。

「さあお入り、」と樹の蔭から聲がしました。「お前さんの欲しいものはよく知つてゐるのよ。今日も又薔薇をあげませう。」

同じ言葉の繰返されないうちに、ローゼンレスリーは速くも庭に踏み込んで、眞蔭らに芳しい薔薇畑へと走りました。紅い花、白い花、淡い花、濃い花等が澤山に入り亂れて咲き匂ふ様を見て、聲をあげて喜びました。そこへ支配人の

奥さんで此の庭の持主が近寄つて來ました。これ迄レスリーに幾度も薔薇をくれ、今しがたもお入りと呼んでくれたのも此の婦人でありました。

奥さんは云ひました。「今日は丁度好いところへ來ましたね。大きな花束をあげますよ。でもなかには、ほら、もう散りさうになつてゐるバラもあるでせう。だから、もう少しおとなしく歩かなくちや駄目よ。いつもの様にあんなに跳び彈ねると、花瓣がみんな、お家に歸らないうちに散つてしまひますよ。」

支配人の奥さんは、念入りに此方から一輪、彼方から一輪、あちらから二三輪といふやうにして、濃淡、紅白、色とりどりに摘み採つて、たうとう大きい素晴らしい花束を作りあげました。ローゼンレスリーは、たゞ眼を丸くして見入るばかりでした、今迄こんなに素晴らしく美しい花を手にしたことはなかつたからです。ところが、そのうちに既う芳しい花瓣がちらほらと散り、坊主になつた花梗が花の間にさびしげに立ち残るので、ローゼンレスリーは大層驚いてみつめてゐました。

「御覽！ 御覽なさい！」と奥さんは警めて言ひました。「とてもゆつくり歸らなくちやあ駄目ですよ。でないと、お家へ歸るまでにそのうちの三本とは満足に花びらが残らないでせう。」

ローゼンレスリーは、丁寧にお禮を言つて歸路につきました。その路のかたはらには佗しげな小屋がありました。そこには寢れた顔のもの靜かな、「ゾルゲンムツテル」「憂ひの母」と呼ばれてゐる婦人が住んでゐました。ローゼンレスリーはその婦人がいつもさう呼ばれてゐるのを聞いてゐましたので、他に名前があるとは竟ぞ想ひもせませんでした。

レスリーは、このお婆さんが窓から見えたのでさけびました。「ゾルゲンムツテルさん、御覽なさい、御覽なさい！ こんなバラを御覽になつたことあります？」

「いゝえ、レスリー、永いこと見なかつたのよ。」と婦人は應へました。彼女は自分の花の馨と輝きに全く心を奪はれながら、なほも歩きつゞけました。道

のはづれにある家でも、彼女はつい道草をくひました。といふのは、十字路の傍らに住んでゐるのでクロイツヴェークボーエリン〔辻農婦〕と呼ばれてゐるその家の主婦^{おかみ}さんが、頑丈な兩腕を腰にあててローゼンレスリーを見てゐたものですから。

その婦人は彼女を呼びとめて言ひました。「まあ、まあ、今日は本當のローゼンレスリー〔薔薇のレスリー〕だね。おいで。をばさんとこへ来てお前さんの寶を見せておくれ。」

ローゼンレスリーは急いで引きかへし、喜んで小母さんに花束を差出ししました。ところが、急激^{はげ}しく揺れたので三ツ四ツのバラから、花瓣がヒラ／＼と地面に散りました。レスリーはつまらな相にそれを打眺めました。小母さんは、「おやおや、私が悪かつたのよ、お前さん。私にこのバラを頂戴、その代りにパンを一^{ひとかたまり}塊あげませう。バラはこれ以上持つてゆかない方がいゝのよ。お家に歸らないうちにみんな坊主になつてしまふからね。さあ私に頂戴。」と云ひ

ました。

「私のバラをみんな……一つも残さないで？」と、レスリーは全く驚いて訊ねました。

「一つは持つて行つてもいいわ。ほうらこれは。でも、あとはすぐに散つて了ふでせう。これをお挿しなさい。これは吃度散らないでせう」さう云つて農婦は前掛を擴げました。レスリーはバラをその上に載せました、ただ一つだけを残して。彼女はそれを上衣の胸のところに挿しました。そこには、殆んどいつも、小さなバラの花がさし狭んでありました。農婦は家の中へはいつて行き、間もなく大きなバンの塊を携つて戻つて來ました。それを見て、レスリーは始めて急にお腹の空いた事に氣付きました。「お聴き、レスリーちゃん、いいことを教へてあげよう」と農婦はバンを手渡しながら云ふのでした、「毎日、夕方小さい籠を持つてバラの貰へるやうな處に行き、今にも散りさうなバラをおもらひなさい。そしてすぐに花瓣がなくならない様に籠に入れるのよ。私はそ

れが欲しいの。さうして毎夕私に一量ひとかまのきれいな花弁はなづらを持つて来てくれれば、
一魂のパンをあげよう。どうでせう。」

「えゝ、うれしいわ、」とローゼンレスリーは答へて歸途かへりみちに就きました。途々上
機嫌でそのパンを食べてしまひました。丁度この兒が再びゾルゲンムッテルさ
んの家の前にさしかゝつた時、をばさんは「束の薪を背負つて還つて來た所で
した。」

「お前さんのあの綺麗なバラはどうしたの、」とをばさんは尋ねてみました。
レスリーはさき程の出來事をすっかり話して、これから毎日クレイツヴェーク 農婦ガイェリンにバ
ラの花びらを持つて行くのだと云ひました。

老婦人は考へ込んで耳を傾けてゐましたが、さて、控へ目に言ふのでした。
「レスリー、明日あんたがあをの小母さんのところへバラを持つて行く前に私の
家にきてくれないかい？ そしたら訊きいてみたいことがあるんだけど。」

「はい、さうしますわ。ぢやあ、お休みなさい、ゾルゲンムッテルのお婆さ

ん！」さう言つてレスリーは家路を急ぎました。叔父さんの離家^{はなれ}に辿り着くと、彼女は静かな寂しい小部屋に入りました。扉はどれも閉まつては居らず、燈火も一つも燈^{とも}つて居りませんでした。彼女は小鳥のやうに、暗闇^{くらやみ}の中で自分の埒^{わくら}をさがし、間もなく安らかに眠りに落ちました。そして夢路にもバラを夢見るのでした。明るい朝陽が彼女の目をさますまで……。

二 小さい助け手の大きな手助け

村人達から「ゾルゲンムッテル」と謂はれてゐる婦人は大變貧しい寡婦でありました。以前は暮し向も悪くはなかつたので、物乞ひなどをする事は知りませんでした。彼女は獨りでひそかに窮乏に苦しみつゝ、寂寞に耐へてすごしてきました。たゞ神様にだけなやみを訴へ、たゞ神様にだけ慰めを求めるのでした。此の慰めだけが彼女には必要だつたのです。彼女の夫は仕立屋でしたが早くに亡くなり、あとには唯獨りの息子が遺つただけでした。此の息子も父の様に仕立屋になることになつてゐました。それは、此の少年の後見人がさう定めてゐましたので、彼もさういふ様に事を決めてかからねばなりません。ところが、ヨセフといふこの息子はそれを好みませんでした。彼はいつもその仕事をさせられると、何處かへ逃げてしまひ、夜晩くなつてやつと歸つてくる



D. Hubert.

か、又は全然戻つて來ないかのどちらかでした。かうして彼は良からぬ仲間と交はりました。その後見人は村長でありましたから、若しも彼が働かず又生活をも改めようとしないうちなら、今度の便船でオーストラリヤへ送つてしまふと言つて、脅かしました。するよ、ヨセフは大變に憤慨して、自分がやりたい仕事をさせてくれるならいくらでも働くし、外地に行くなら何もわざ／＼送られないまでも自分で往く、と言ひました。そして彼はそれつきり姿を消してしまひ、もう全然戻つては來ませんでした。お母さんは非常に悩みましたが、今は全く息子を神様にお委ね申しました。村の人々が悔んで、「彼女があんなに祈つてみたところで何にならう。彼女はなやみのために落魄れて居るぢやないか。あのヨセフも吃度他國で落魄れて死んでしまふだらうよ、」などと言ふ時に、――

彼女はお腹の中で應へてやるのでした、「假令私が最後迄憂^{ブルガナムツゲル}の母として生き、悲惨な運命の中に死なねばならないとしても、私は神様に對してヨセフが吃度正しい道に立ちかへるにちがひないといふ信頼を決して失ふまい。私はあの子

が生れ落ちた時からあの子を神様にお委ね申し上げたし、そしていつも新たに
お委ねし、あの子の爲に深く祈つてゐる事が萬が一にも無駄であらうとは思へ
ないのだから。」

ローゼンレスリーは、翌日學校がひけると直ぐに又出掛けて行きました。彼
女は小籠は有つてゐませんでしたが、前掛けでバラを包まうと思ひました。樂
しげに跳びながらあの大庭園に着きました。支配人の奥さんはその花園をあち
こちと歩き廻つてゐました。奥さんはこの兒に呼びかけてかう言ひました、「レ
スリーちゃん、またバラが欲しいんでせう。はいつていらつしやい。きつとま
だあげられさうなのが一つか二つあるでせう。」

「散りさうになつてゐるのでいいの。」とレスリーは答へて、今日は一ひらも
地面に落ちないやうにと可愛い前掛けをさし擴げました。

「ああ、そんな心算なら、お前掛けに一杯にしてあげませう！ さあこつちへ

おいで。」

支配人の奥さんは、バタの一杯咲いてゐる大きな花畠はなに伴れて來ました。でも、それはみんな開花ひちき切つてゐるばかりでなく、もう半ば散りかけてゐました。奥さんが澤山切り採つてくれましたので、ローゼンレスリーの前掛けは見る見るうちに一杯になりました。

「明日再あした來てもいいの？」とレスリーは希望に満ちてたづねました。

「ああ、いいですとも、」と奥さんは應へて、「あんたさへよければ、こんなに咲きすぎたのならいくら持つて行つてもいいんですよ、」と言ひました。

ローゼンレスリーはお禮を云つて、喜んで驅け戻りました。ゾルゲンムッテルさんの崩れかけた小舎こやのところまで來ると、彼女はきのふ歸りによると約束したことを想ひ出しました。レスリーが低い天井の小部屋に入ると、ゾルゲンムッテルさんは紡つむぎぐるま車のお仕事をしてゐました。お婆さんは大變親しげにレスリーを迎へました。それから老婦人は窓へ行つて、そこに生えてゐる小さな

薔薇の木から紅い小バラを二輪切り採つてこの兒にやりました。

老婦人は躊躇ひ氣味に言ひました、「ねえ、レスリーや、この二輪の小バラも一緒に持つて行つておくれでないかい？　きつとあの農家の小母さんが、小さいパン片きれかもしれないけど、パンを少し許りくれるだらうと思ふから。試つてみておくれかい？　レスリーや？」

「ええ、ええ、」彼女は口速に、「さうしたら直ぐそのパンを持つて來てあげてよ。直ちきに來るわよ。」と言ひました。

クロイツヴェークボーエリン（辻農婦）は塀に沿つた家屋いえの前の菜園のところに立つて、塀の上に並べてある籠を一つ一つ覗きこんでゐました。籠の中には芳しい薫りのする薔薇の花びらが擴げて陽に干ほしてありました。農婦は毎年芳しい薔薇香水を作つてゐたのです。それには澤山の薔薇の花びらが要るのですが、さう容易たやすく手に入るわけではありませんでした。

ローゼンレスリーがそこへ來て前掛けを擴げると、農婦は満足さうに申しま

した。「まあ宜かつたこと。今日は素敵なバンをあげようよ。」

「こゝにもまだ二つあるの、」と言つてレスリーはゾルゲンムッテルからの薔薇の小花を高く差揚げました。

「それもこつちの花の中に入れなさい。細いけど少しは花びらがあるから。」

「だけど、この花のために別にバンが欲しいの、」レスリーはさう言つて、なほも此の薔薇をしつかりと持つてゐました。

「ああ、解つてゐる。」と言ひながら、農婦は家にバンを取りに入りました。

「小母さん達も昔さうでしたよ。學校であれこれ換つこをしたもんだよ。バンと梨か李桃を二つ三つと云ふ風にね。ねえ、さうでせう、レスリーや。さあお取り、これが前掛けのバラのための大きなバン塊、それからこの小さいのがその二輪と換へるバン。それで好いね？」

「えゝ、いゝわ、本當に」と講合ふ様に答へ、お禮を充分に言つて歸途につきました。レスリーは小さい方のバンはゾルゲンムッテルさんのために前掛けに

入れ、大きい方に、我慢しきれなくなつて齧りつきました。お晝も殆んど食べてゐませんでしたし、勿論、晩は何もありませんでしたから。それで、レスリーはその大きな塊かたまりを古びた小舎こやに着く前にすっかり食べてしまひました。さあ着きました。レスリーは入つてゆき「さあ。ゾルゲンムッテルのお婆さん、バンよ！」と叫ぶのでした。

婦人は子供の手を取り、有難うと手を握つて言ひました、「どんなにお前さんが私に親切をしてくれたか、お前さんにはお解りでないでせう。レスリー、ねえ、あの小つぽけな庭には馬鈴薯じやががあるばかりなのさ。だけどそれが私の唯一つの食物たべものなんです。でもじゃがいもでは、時々胃が消化こしかねてしまつてさ、バンは高價たかくて困るし。だから殆んど何も攝とれなくなると弱つてしまつて紡ぐことさへ出来なくなつてね。で、レスリー、お前さんがバンを持つて来てくれたので、どんなに私はうれしか。本當に有難うよ。」

そこでローゼンレスリーは、ゾルゲンムッテルさんには小さいバンしか持つ

て歸らず、自分が大きな方を取つたことを残念に思ひました。絶えずその事を心の中で想ひ返さないわけには行きませんでした。ああ、自分は小さいのを採つて大きな方を食べなければよかつたのに、と。レスリーは大變しよげてしまひました。それでゾルデンムツテルはレスリーがきつと未だお腹が空いてゐるのだと思ひ、そのパンをどうしても返さうと致しました。けれどもレスリーは「いゝえ、いゝえ、いらないの。私、もう充分食べたの。また明日来るわ!」さう言つて立ち去りました。

翌日の夕方、レスリーは間違ひなくやつて來ました。もう一度、支配人の奥さんは前掛けをバラの花で満たしてくれました。もう一度、ゾルデンムツテルさんは二輪のバラを莖から手折つて一緒に持つて行つてもらひました。レスリーはこれを持つてクロイツヴェークボーリエリンの許に行き、農婦がバラの花を前掛けから取りあげると、言ひました。「今日はパンを一塊だけにして戴け

ないの？　ただどきのふの二つ分の大きさを？」

「さう、私もさう考へてゐたのよ！」と農婦は應へて、「パンなどを林檎や梨ととりかへるのは面白くないつてことが解つたんだね。それで宜いから、忘れないでね。今日のお花はとても新鮮新鮮しいこと。ぢやあ素敵すてきなのをあげよう。一緒においで。」

農婦は臺所へ入つて行つて大きなまるのままのパンを取り出し、素晴らしいパン片れを切り取りました。レスリーは、そんなにも大きなパン片れを生れてこの方手にした事はありませんでした。大急ぎでゾルゲンムツテルの許に駆けつけて、彼女の手にそのパンをそつくり渡しました。喜悅よろこびに顔を輝かせながらレスリーは一かじりもする氣にはなれなかつたのです。あの大きな塊を自分のためにとつて小さな方をゾルゲンムツテルに與へた一事いちじが、捺印おしりのやうにレスリーの胸にいつも消えないでゐたのでした。おばあさんが驚異おどろきの眼差まなざしでそのパンをしげしげと觀たときに、レスリーは全く喜悅よろこびに輝きました。でもおばあさ

んはレスリトにそれを差出すのでした。

「レスリーや、一體どうしたことかね？　これはお前さんのパンぢやないか。

さあ、お取り！　その中から一片ひときれ小さいのを裂いてくれりや、私は有難い。」

「いゝえ、いいえ、私は一片だつて要いらないのよ。お休みなさい。また明日あした来るわ！」子供はさう叫びました。

「もうバラの花はなくなつてしまつたの、レスリーや。どうも有難う。お前さんが私にどんなに親切だつたか知れないんですよ！」

婦人は眼に涙を浮べながらレスリーの背後うしろから申しました。レスリトにはゾルゲンムッテルさんの言ふ意味がよく解つてゐましたので、一瞬の間深い想ひに沈みました。けれども何事か心に浮んだと見え、晴れやかな氣持に立ち歸り、喜び歌ひ、悦び躍りました。明日は何をしようか、既に考へ出したのです。

支配人の奥さんのところでもやがてバラの花が盡きてしまひました。でもレ

スリーは今迄あちらこちらと歩き廻つたお蔭で澤山の庭園を知つてゐましたので、何の心配もなくバラを見つけ出すことが出来ました。彼女の脚は速く軽やかでしたから、どんな途^{みち}も遠すぎることはありませんでした。斯うして、毎夕前掛けに一杯のバラの花を農婦の許にもつてゆき、その都度バンをもらひましたが、それは小さくなるどころか、むしろ大きくなるのでした。それといふのも、農婦がレスリーの働き振りに非常に満足してゐたからです。同じ様に薔薇香水を製造してゐた隣家^{となり}のお女將^{かみ}さんは、時折幾分美しげに屏越しに覗いては、レスリーが前掛け一杯のバラの花をばら撒^まく有様を見て言ふのでした。自分よりクロイツヴェークボーエリンの方が良い薔薇香水を作ることが出来るのは、ちつとも不思議ぢやあない、自分もあんなに立派なバラの花を工面することが出来さへすれば、あれ位の香水を作り出すことは出来る筈だと。

レスリーはあれ以來、貰つたバンを決して食べませんでした。それでゾルゲンムッテルがどんなに拒^{こは}んでも、又どうにかしてレスリーと半分づつにしよう

としても、老婦人はそのバンの全部を受け取らねばなりませんでした。ところで、レスリーは時折たづねてみるのでした、「ゾルゲンムッテルのおばあさん、バンはお役に立つてゐて？」すると彼女はレスリーに繰返し語るのでした。彼女が毎日バンを食べる様になつてからはどれ程身體に力が出て来たかを感じてゐるか、又どれ程澤山紡ぐことが出来るやうになつたか、その稼ぎのお蔭で冬も今迄の様に凍える心配のなくなつたことなどを。

をはりに彼女はいつも言ふのでした、「いつかお前さんの親切にお禮するところが出来ればいいんだけれどね、レスリーや！」

けれどもレスリーの顔は喜悅に耀いてゐましたから、もうそれだけで最善の酬いに心が充ち溢れてゐるのだといふことがよくわかりました。

斯うして、此の事は薔薇の花咲く季節が過ぎゆくまで續きました。ある夕のこと、レスリーが遠くまで走り廻つてみた揚句、どの庭園を覗いても無駄であつて、たうとう半ば萎れた小バラをたつた三輪しか農婦のところへ持つて行け

なかつたときのことでした。「もうバラもお終ひだね、でも來年またお前さんは綺麗な花束を持つて来てくれるね。」と農婦は云ふのでした。

この言葉はレスリーの胸に深く響きました、農婦は何氣なく云つたのでした。この農婦はかう想つたのです、こんな子供はそちこちの良家からもらつてゐるものがあるだらう、自分のやるバンなどは大したものではないだらうと。けれども、レスリーはあのゾルゲンムッテルさんのことを想つてゐました、若し僅かばかりの馬鈴薯の他に食べるものが何もなくなつたら、あのお婆さんはどうなるかしらと。大きな涙がレスリーの眼に浮んで來ました、バラと共に一切が終つたことが判然はつきりしましたので。

「ねえ、ねえ、お泣きでないよ、レスリーちゃん」農婦は可哀想に思つて言ひました、「來年の夏、またあんなに澤山の綺麗なバラの花を持つて来てくれることを約束すれば、この冬中毎日お前さんにバンをあげようね、さうするかね？」すると涙は直ぐ干かわいて、レスリーは喜悅よろこびに輝きました。

「えゝ、吃度さうするわ。バラの花はみんなあげるわ。それから忘れな草も。」
「それは要らないね。バラは忘れないで！ さあこれがお前さんのバン。それにもう林檎の季節になつたから、林檎もあげようね。さあこれもレスリーや！」
さういつて農婦は大きな紅い林檎を採つて、バンと一緒に子供に差し出しました。大満足でレスリーはこの寶物を擁^{かか}へて走り去りました。それを農婦は満足氣に見送つてゐました。彼女はレスリーが好きで、その快活^{かっ}なのを喜んでゐたからでした。おまけに、よかつたことには、農婦は翌年^{としな}の夏最も美しい薔薇の花が確かに手に入るやうになつたことです。彼女は隣家^{とな}のお女將^{かみ}さんがいつも彼女のバラの花びらを覗き見してゐたことに氣がついてゐましたから、この隣^{とな}人がもしかして翌年の夏を見越してレスリーを遠ざけるやうなことがあるかもしれないと幾分心配だつたからです。それも、レスリーが今までいつも美しいバラを持つて來たことをそのおかみさんが氣付いてゐたに相違ないからでした。

ゾルゲンムッテルも喜びの夕を迎へたわけでありました。この老婦人のわびしい部屋にいつも陽の光を齎らしてゐたレスリーが、農婦と約束して來たことを残りなく告げ終ると、ゾルゲンムッテルは手を組み合はせて、神様がこの兒を善き天使のやうにお遣はしになつたこと、また心配の種子であつた冬を斯うも心配なく迎へることが出来るやうになつたことを、神様に心靜かに感謝いたしました。

三 ローゼンレスリーの憂ひ

その後幾日か経つた頃、ある奇異な變化が起つたやうに見えました。それは
ゾルゲンムツテルとローゼンレスリーがその持前の特徴を取換へたかと思はれ
るやうな變化です。ゾルゲンムツテルが穩やかな喜ばしげな面持をして紡車で
仕事をして居りました時、レスリーが、それにひきかへて非常に打ち沈んだ様
子でやつて來ました。まるで永久に快活さの奪はれてしまふ出來事にでも出遭
つたかのやうに見えました。

「どうしたの、レスリーや、どうおしだえ？」と愕いてゾルゲンムツテルが訊
きますと、

「上衣に穴が開いたの、」とかなり烈しい調子の應答でした。「學校で子供達が
私をひやかしたの。みんなが私の背後から走つて來て、聲を揚げて歌ふのよ。」

わざと大きな聲を張りあげて、

ローゼンレスリー、あやほらぎ紅い薔薇木

ローゼンレスリー、あやほらぎ穴開き上衣！

さう言ひながらレスリーは享けた嘲笑を想ひ出して、大きな涙を頬に流してゐました。

「子供らがさうお前さんをひやかしちやいけないね。でもきつと悪戯ぢやあなかつたんでせう。レスリーや、破れたところを見せなさい！ 繕つてあげよう！」とゾルゲンムッテルは慰めるのでした。それでレスリーがゾルゲンムッテルさんの側そばに行きますと、穴は捜すまでもなくすぐ見つかりました。大きな穴が開いてゐたのでした。子供は低い椅子に腰かけさせられ、お婆さんは針と糸とを持つてきて繕ひ始めました。

けれどもレスリーは悲歎かなしみをまだ忘れ切れず、聲をあげて啜り泣いてゐました。「もう心配おしでないよ、レスリーや」ゾルゲンムッテルはやさしく云ふので

した。「そんな辛い目に二度と遭はないやうにしてあげよう。私が毎晩お前さんの上衣をよく視て、どんな小さな穴でも直ぐ塞いであげる。若しお前さんがどこかに引つけて、かき裂きをしたら、直ぐ私のところへお出で。そしたらぢきに繕たはしてあげるからね。そしたらうれしいでせう？」

「えゝ、それなら嬉しいわ」とレスリーは氣輕になつて言ひ、直ぐ涙を拭ひました。「でも私思つたの、毎朝また穴が開くんぢやないかしらと。さうすれば毎日みんなが後から走つて來て斯う歌ふんぢやないかしら。」

ローゼンレスリー、紅あかい薔薇ばら木——

さう思ふと、もう決して學校へはゆくまいと考へたの。」

「でも……でもね、レスリー、そりやあ駄目ね、學校へ行くのは決まつた事ですもの、而も善い法則こてですもの。學校へ行かなければ何んにも習へないでせう。で、考へてごらん、誰でも辛い目に遭つたときに、直ぐそれを避けてはいけな
いんですよ。私たちはむしろおだやかにそれを耐へ忍ばねばなりません。神様

がいつもさういつた辛い事を通して、他の場合には學び得ないことを教へて下さらうとして居られるのですから。私達がなやみや悲しみの中で氣を崩してしまはなければ、神様に智慧と慰めを求めることが出来ませう、そして神様がどんな方であるかを學び知ることが出来るのです。さうすると私達に信賴の心が與へられます。それは呼び求めさへすれば私達を助けて聽いて下さる天の神様がいらつしやることがわかるから。レスリーや、お前さんも神様にお祈りするの？」

子供はちよつと考へて言ひました、「はい學校で。」

「學校でどんな風にお祈りするの？」

レスリーはそのお祈りの文句を息もつかずに言ひ始めました。續けざまに言はうとして語句の調子を變へるひまもなく、矢繼ぎばやに唱へました。

あかつきを心楽しく

始めよや、み神と共に。

胸には歡喜、口には感謝

是れ人の子にふさはしきなり。

これだけしか知らないの。」レスリーの聲は途切れました。實際その先の語句を知らなかつたのです。

「美しい一節ですよ。もう少しゆつくり言へばなほよかつたのさ、レスリー。

今の言葉がお前さんに何を語らうとしてゐるのか、考へてみたことはおありかしら。」

「いゝえ、考へてみたことないわ、」とレスリーは應へました。

「ねえ、それは斯ういふことでせう、先づお前さんが朝起きたら神様を想つて歡び、一晚中お護り下さつた神様に感謝しなさいといふんでせう。朝のお祈りはさうだけれども、夕のお祈りも知つてゐる？」

「いゝえ、何んにも知らないの。」

「それぢやあ、却て自由に心からお祈りすることが出來ますよ。で、もし晝間

何か間違つたことをしたら、神様にお赦しゆるをお願いし、再また同じ間違ひをしな
い様にお助けを願へば宜いんですよ。ねえ、レスリー、神様に正直にお祈りす
ることが出来たときには、本當に歡びにみたされます。で私も若しいつもお祈
りをしてゐなかつたら、もうとつくの昔に悲痛くわんしつのために死んでしまつてゐたで
せう。」

「どうして？」とレスリーは不思議さうに訊ねました。

「だつて、ごらん、理由わけはたくさんあるんですよ。私はひどく貧乏なので、と
ても暮してゆけないの。私には息子が一人あつて遠く外國に行つてゐるんです
よ。あの子のことは何んにもわからないんだけど、きつと慘めみじなことになつて
ゐるでせう。若しかするともう死んでしまつたかもしれないけど。でも若し私
が、息子が此の世に生れて來たときと同じ様に、毎晩神様に彼をおまかせして
は『あの子はあなたのものでございますもの、あの子を助けて下さいませ！』
とお祈りする事が出来なければ、私はなやみと憂ひのために決して眠ることが

出来ないでせう。けれども斯ういふ風にお祈りすると、私の心に慰めと信頼の念が起つてくるの。」

「ぢやあ、私もお婆さんが息子さんの爲にお祈りするのを助けてあげるわ。」とレスリーは言ひました。

「そりや嬉しい、それは嬉しい。お前さんがヨセフのためにお祈りしてくれば屹度お前さんのためにもなるでせう。お前さんがよくお祈りすることが出来たら、自分のためになることが解つてくるでせう。」

「どうして？」とレスリーは再^{また}尋ねました。

「ねえ、レスリー——ゾルゲンムツテルは情け深く、而も幾分憂はしげに語り始めました。——「お前さんの叔父さんは財産を目茶々々にしてしまつたので、家宅も畑地も今に手離して了ふといふことです。さうしたら、お前さんは見知らぬ人のところへ行かなければならないでせう。そこでは仕事ばかり多くて優しい言葉などは殆んど聞くことが出来ないでせう。お前さんは未だそんな

事は知らないでせうが。でも、お前さんが神様に何んでも御願ひ申上げれば、神様は慰めを與へて下さるのだといふ神様の教が解るやうになつたら、どんなことになつたとしても幸福なのですよ。」

「さうなつたら私、お婆さんのところに來て住みたいわ。」とレスリーは心配するどころかむしろ欣んで言ひました。

「ああ、お前さんは善い子だね。でも私はお前さんを養ふわけには行かないのさ。さうなつたらどうしようね。でも神様を信賴しませう。神様はお前さんを顧みて下さるでせう。さあ、修繕はみんな出來ましたよ、レスリー」と話しながら子供の小さな上衣を隈なく調べて、繕ひ終つたゾルゲンムッテルさんは斯う言ふのでした、「また破れたら私のところへお出で、いくらでもなほしてあげますよ。」

レスリーは、厚くお禮を述べて心も軽く立ち去りました。以後、二度と再び學校で嘲笑を受ける事はありませんでした。このことがレスリーを安心させた

出来ないでせう。けれども斯ういふ風にお祈りすると、私の心に慰めと信頼の念が起つてくるの。」

「ぢやあ、私もお婆さんが息子さんの爲にお祈りするのを助けてあげるわ。」とレスリーは言ひました。

「そりや嬉しい、それは嬉しい。お前さんがヨセフのためにお祈りしてくれば屹度お前さんのためにもなるでせう。お前さんがよくお祈りすることが出来たら、自分のためになることが解つてくるでせう。」

「どうして？」とレスリーは再た尋ねました。

「ねえ、レスリー——ゾルゲンムツテルは情け深く、而も幾分憂はしげに語り始めました。——「お前さんの叔父さんは財産を目茶々々にしてしまつたので、家宅も畑地も今に手離して了ふといふことです。さうしたら、お前さんは見知らぬ人のところへ行かなければならないでせう。そこでは仕事ばかり多くて優しい言葉などは殆んど聞くことが出来ないでせう。お前さんは未だそんな

事は知らないでせうが。でも、お前さんが神様に何んでも御願ひ申上げれば、神様は慰めを與へて下さるのだといふ神様の教が解るやうになつたら、どんなことになつたとしても幸福なのですよ。」

「さうなつたら私、お婆さんのところに來て住みたいわ。」とレスリーは心配するどころかむしろ欣んで言ひました。

「ああ、お前さんは善い子だね。でも私はお前さんを養ふわけには行かないのさ。さうなつたらどうしようね。でも神様を信賴しませう。神様はお前さんを顧みて下さるでせう。さあ、修繕はみんな出來ましたよ、レスリー」と話しながら子供の小さな上衣を隈なく調べて、繕ひ終つたゾルゲムツテルさんは斯う言ふのでした、「また破れたら私のところへお出で、いくらでもなほしてあげますよ。」

レスリーは、厚くお禮を述べて心も軽く立ち去りました。以後、二度と再び學校で嘲笑を受ける事はありませんでした。このことがレスリーを安心させた

ことは非常なもので、そのお蔭で、多分間もなく彼女が他人の許に移され、仕事を澤山やらなくてはならないことになるでせう、といふあのゾルゲンムッテルさんの言葉をすつかり忘れてをりました。

けれども、レスリーはゾルゲンムッテルとの約束した事は忘れませんでした。それは、彼女が眠りに就くときに、確つかりと聲をあげて、而も心から、「神様、ヨセフさんを助けてあげて下さい！」とお祈りしたからであります。――

永い嚴^{きび}しい冬が來ました。ゾルゲンムッテルは凍えるやうなおもひはしたのですが、ここ數年のやうに飢^うゑるおもひはなかつたのです。彼女の細々^{ほそこ}とした健康はかうして保たれました。ローゼンレスリーは、彼女の支柱^{はしら}でもあり、扶養者^{やしなひて}でもありました。晩秋の或日、レスリーはゾルゲンムッテルが薪の小さな束をやつとのことで曳^ひき摺り歸るのを見たのでした。それ以來、レスリーは毎日森の中へ走つて行つて薪を澤山搜して來て、ゾルゲンムッテルが自分の小

部屋で火をおこしたり、小さなストーブでパンスープをこしらへることが出来るやうにしてあげました。學校がひけると毎夕、寒空でも、暴風が吹いても、吹雪のときも、ローゼンレスリーは辻農婦のもとに姿を現はしました。屢々彼女は寒さのため蒼ざめ、手足を顫はせてゐました。それは冬衣の上衣はあつても暖かいものではなく、單に頸と肩とに薄衣を纏うてゐたにすぎなかつたからです。農婦の方では、子供が寒さにガタガタ顫へてゐるのを見る度に、この子は屹度空腹なのであらしや荒天の日でもパン片をもらひに走つて來るのだと想つてゐました。彼女はこれを不憫に思つて、パンの大塊に庖丁を深く入れて夏に與つたどのパン塊よりも大きくしてやりました。けれども、レスリーは全部をゾルゲンムッテルのところへ持つて行つて、半分は自分で食べなさいといふお婆さんの願ひも固く拒みました。レスリーは度々空腹のまま寢床に就くことがありましたが、ゾルゲンムッテルさんが困らないことを想ふと嬉しいのでした。そして、「神様、ヨセフさんをどうぞ助けて下さい！」とお祈りして――

安らかに眠り込むのでした。

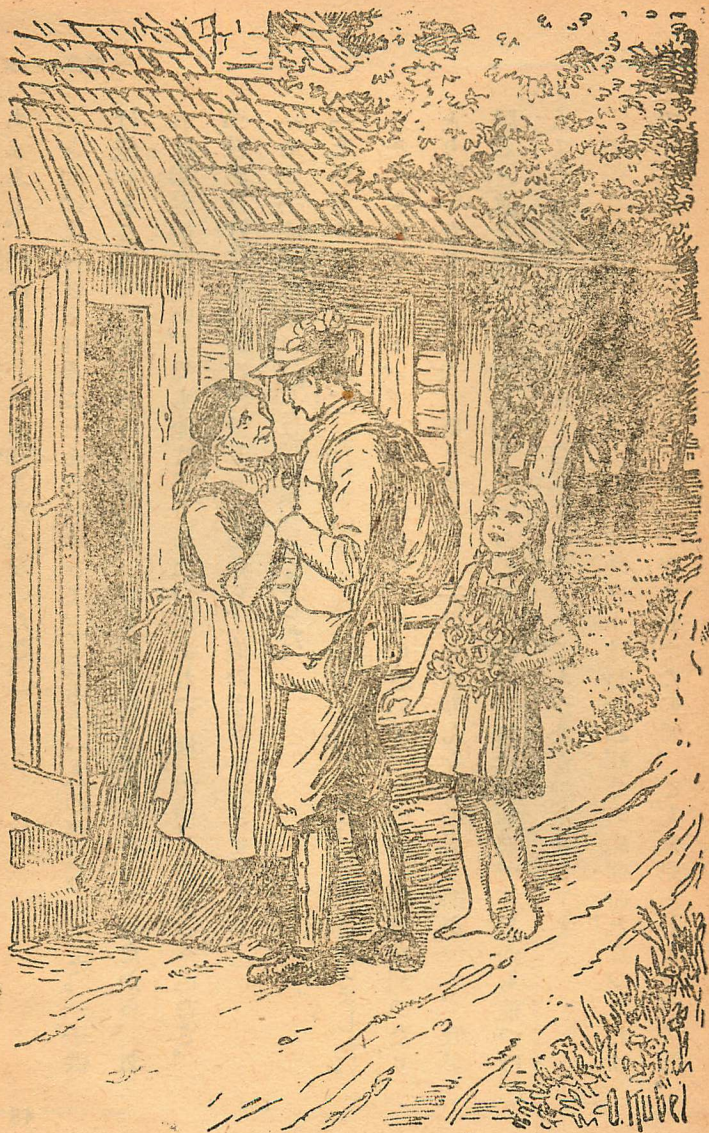
彼女の小さな上衣は、冬中ゾルゲンムッテルが面倒を見てくれたので破れることもありませんでした。それで、もう學董がローゼンレスリーの背後うしろからあざ笑つたりひやかしたりすることはありませんでした。

四 「憂ソルゲンムツテルひの母」の解消

夏が再ためぐつて来て、どこの庭にも薔薇が花咲き馨かほつてゐました。どの花はなもバラで満ち、若木は花を一杯に着けてゐました。それは素晴らしい「バラのあたり年」であつたのです。夏の夕陽は、ヴァルドバッハとその界限かいぎんの草地や森の上に耀きらかしい光を投げてゐました。

デイトリツヒの小屋は黄金こがねの夕陽に照り映え、その輝く姿はあたりに笑ひかけるやうでありました。ところが、その前に二人の男が浮かぬ顔付きで佇たどんでゐました。その一人は叔父のデイトリツヒであつたのです。彼は翌日あすになると、自分の家も畑地も牝山羊も没収され、おまけになほ負債のため全く頭が廻らないことを知つてゐました。

彼は兩手もろてをポケットに挿しこんで、非常に不機嫌に言ひました、「俺わしは行つ



ちまふよ。俺はもう何にも知りたくないんだ。」

「お前は見付けられることを忘れるなよ、」ともう一人の言ひました。「子供は俺のところで引きとるさ。お前がいつも走り使ひばかりさせてゐたから、あれは無論働けまい。でも俺はどうしたつてあれに耨くさかせの使ひ方を教へ込むさ。

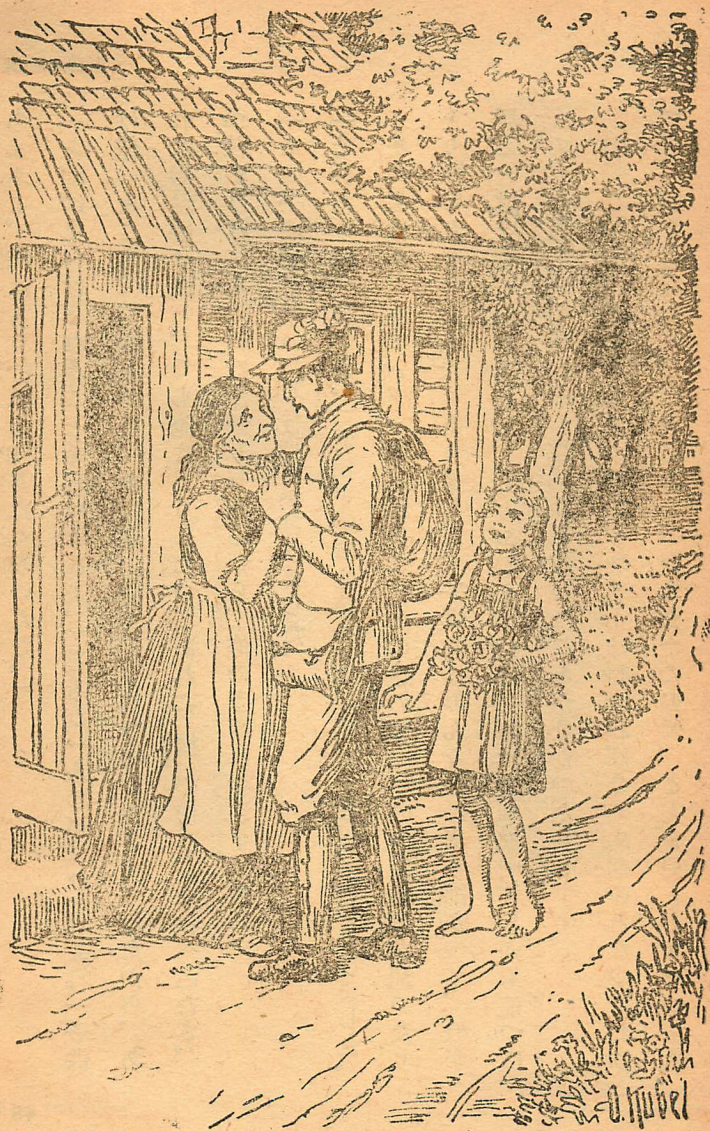
學校がひけても時間はたつぷりあるから、俺の手傳ひをさせてやる。」

「あの子は未だ幼い。」と叔父が言ひました。

「それだけ教へ易いさ。」と相手の者は答へて、さつさへ行つてしまひました。

その男はヴィルドバツハの道路夫で、その邊のすべての道の雜草を刈つたり、とり除いたりする人夫でありました。子供らはみんな此の男を怖こはがつて、彼が居ると道を避けるのでした。といふのも、彼は大變に意地悪で、しかも荒つぽくて、一遍も親切味のある言葉など發したことがなかつたからです。

翌朝この男のところへローゼンレスリーは行かねばならぬ運命となつたわけです。彼には自分の子供といふものがなかつたので、こんな兒を引き取つて色



ちまふよ。俺はもう何にも知りたくないんだ。」

「お前は見付けられることを忘れるなよ、」ともう一人の言ひました。「子供は俺のところまで引きとるさ。お前がいつも走り使ひばかりさせてゐたから、あれは無論働けまい。でも俺はどうしたつてあれに、くさかき耨くさの使ひ方を教へ込むさ。

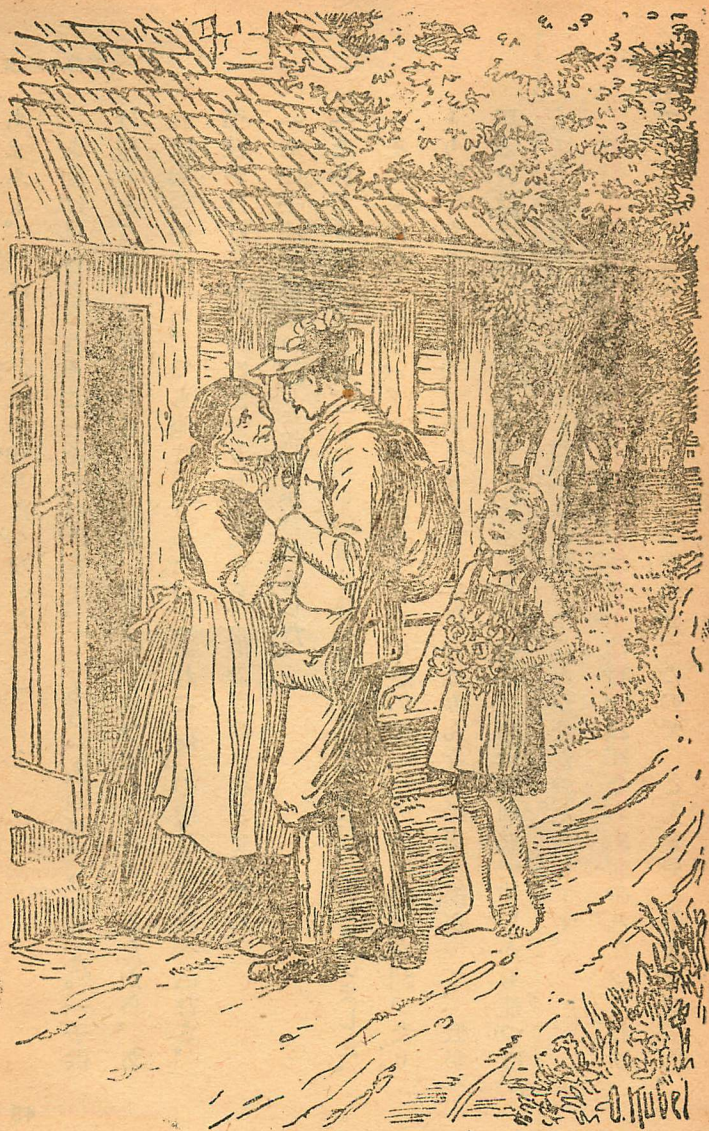
學校がひけても時間はたつぷりあるから、俺の手傳ひをさせてやる。」

「あの子は未だ幼い。」と叔父が言ひました。

「それだけ教へ易いさ。」と相手の者は答へて、さつさへ行つてしまひました。

その男はヴィルドバツハの道路夫で、その邊のすべての道の雜草を刈つたり、とり除いたりする人夫でありました。子供らはみんな此の男を怖がつて、彼が居ると道を避けるのでした。といふのも、彼は大變に意地悪で、しかも荒つぽくて、一遍も親切味のある言葉など發したことがなかつたからです。

翌朝この男のところへローゼンレスリーは行かねばならぬ運命となつたわけです。彼には自分の子供といふものがなかつたので、こんな兒を引き取つて色



ちまふよ。俺はもう何にも知りたくないんだ。」

「お前は見付けられることを忘れるなよ、」ともう一人の言ひました。「子供は俺のところで引きとるさ。お前がいつも走り使ひばかりさせてゐたから、あれは無論働けまい。でも俺はどうしたつてあれに耨くさかせの使ひ方を教へ込むさ。

學校がひけても時間はたつぷりあるから、俺の手傳ひをさせてやる。」

「あの子は未だ幼い。」と叔父が言ひました。

「それだけ教へ易いさ。」と相手の者は答へて、さつさとして行つてしまひました。

その男はヴィルドバッハの道路夫で、その邊のすべての道の雜草を刈つたり、とり除いたりする人夫でありました。子供らはみんな此の男を怖こはがつて、彼が居ると道を避けるのでした。といふのも、彼は大變に意地悪で、しかも荒つぽくて、一遍も親切味のある言葉など發したことがなかつたからです。

翌朝この男のところへローゼンレスリーは行かねばならぬ運命となつたわけです。彼には自分の子供といふものがなかつたので、こんな兒を引き取つて色

色な下働きをさせるにはお誂へ向なことでした。

レスリーは二人の男の決めたことを夢にも知りません。今しも元氣に溢れて草原をいくつも通り、ヴィルドバツハを越えて遠く水車小屋迄歩いて來ました。其處の庭には素晴らしい薔薇が充ち満ちてゐました。粉屋の小母さんがレスリーに大きな花束を約束してゐたのでした。間もなく、彼女はバラを手にして喜ばしげにまた同じ街を黄金の夕陽を浴びながら歸つて來ました。まだそんなに行かない中に、後から一人の若者が速脚でやつて來ました。その人は、手に麥藁帽子を持つて、清々しい夕の微風のをよそよと頭のあたりを吹くのにかせてゐました。

「綺麗なバラだねえ。」とレスリーに追ひついて呼びかけました。「私の帽子に一つ挿してくれないかね。」

レスリーは點頭き、花束から一つ引き抜きました。

「お前は感心だね、一番美しいのをくれたんだね、」と見知らぬ人は花を帽子に挿しながら言ひました。「お前は未だどれ位往かうつていふのだね。」

「私はヴィルドバツハのお家へ歸るの。」と答へるのです。

「さう、ぢやあ道が同じだ。」と旅人は言つてレスリーと並んで歩きました。

「お前がヴィルドバツハから來たのなら、あそこの人達のことを知つてゐるだらう。何か私に話してくれることが出来るだらうね。ねえ、シュタインマン夫人はまだ生きてゐるかしら。そして達者だらうか？」

「さういふ婦人は知りません。あそこにはさういふ名の人はいなくなつてよ、」とレスリーは言ひました。

「ああ、さうかね！ おや、さうかね！」と旅人は嘆息して黙りこみました。

レスリーは不思議さうに彼を見上げました。彼は時折ポタ／＼おちる涙を拭ひつつてゐます。先程の晴やかさはもう見えませんでした。

二人は永いこと黙つたまゝ歩いてゐましたが、再た旅人が口を開きました。

「クロイツヴァークボーエリンの處へ行く道は知つてゐるかね。」

レスリーは判然と首肯はつきりうなづいて、「私毎日其處へ行つてゐるの、」と言ひました。

「それぢやあ、あの道の左側で曲つた柳の木のそばの慘めな古びた小屋には、今誰が住んでゐるだらうね？」

「あそこにはゾルゲシュムッテルさんが住んでゐてよ。私よく知つてゐるわ。」

「それは一體何んといふをかしな名だらうね？ 他に名前はないのかね？」

「ちつとも知りませんけど。」

「その婦人は心配が多いのでさう謂はれてゐるのかね？ 知つてゐる？」

「えゝ、あの婦人は心配があるのよ、ヨセフさんといふ息子さんがどんな慘めなことになつてゐるかわからないもんですから！」

「ああ、さうかね！ おゝ、さうかね！」旅人は再たさう叫んで、急に大腿に歩き出しましたので、レスリーを遙か追ひ越しました。けれども、また戻つて來て、子供の手を取つて大層親しげに斯う言ひました、「さあおいで、一緒に

行かう、もう少しお話しをしよう。」さう言つた彼の顔が大變親切に慕はしく見えたので、レスリーもすつかり信頼の念を起しました。

彼はそこで訊ね始めました、「どうだらう、ゾルゲンムッテルさんはそのヨセフのことを悪く思つてゐるだらうか？」

「いゝえ、いゝえ、毎晩お婆さんはヨセフさんのためにお祈りをするの。さうでないとおの方では決してお眠りになれないのよ。で私もお祈りのお助けをしてゐるの。」

「さうか。でお前さんは彼のために一體何んてお祈りするの？」

「お祈りはね『神様、ヨセフさんをどうぞ助けてあげて下さい』つていふの。」
「吃度神様が今こそお前さんのお祈りを聽いて下さつて、彼を助けて下さつたのだね。」

「さうお思ひになつて？」とレスリーは問ひ返し、緊張し切つて旅人を見あげました時、旅人の顔は歡喜にきらめいてゐるのでした。彼はそれ以上に何も言

ひません。

やがて、二人は曲つた柳の木の近くに來ました。古びた小屋から數步隔つたところまで來たわけです。

「では左様なら」とレスリーは告げながら、旅人に手を差し伸べました。ところが、彼が黙つてゐるので、確かに幾分か當惑して、「私、ゾルゲンムツテルさんのところへ入いつていつてみませう。」と言ひました。

「僕も一緒に行かう、」旅人は急いで言ひました。けれども、彼らが扉を開けないうちに、扉は内側から押し開かれ、ゾルゲンムツテルが衝き出るやうにして立ち現はれ、この旅人を擁擁いては繰り返し繰り返し、「おお、ヨセフ！ヨセフ！本當にお前かね？」と言ひ、歡びの餘り聲を揚げて泣かずには居られませんでした。ヨセフも彼女と共に涙を流しました。さて、レスリーは、その旅人がヨセフで、今やゾルゲンムツテルの許に立ち歸り、思つた程にはみすばらしい様子をしてゐない立派な人であるのを知つたとき、彼女も歡喜に我を忘れ

て泣いてゐる母親に抱きつき、雀躍して叫びました、「神様がヨセフさんを助けて下さつた、神様がヨセフさんを助けて下さつた！」

さて三人は家の中へ入りました。そのとき始めて、ゾルゲンムッテルは息子を頭のでつぺんから足の先までうち眺めました。彼女の胸は感謝と歡喜に溢れました。それは息子がひどく零落けぢめて慘めな生活をした人のやうには見え、また憂悶うれひの幾夜か夢幻ゆめまぼろしの中に見た元の人ともちがつてゐたからでありました。息子は見盡みつくすることが出来ない程立派でありました。

「いらつしやい、お母さんいらつしやい、」若者は今や喜ばしげな面持で叫びました。「さあ一緒に腰かけて何か食べ、楽しい團欒つとんをいたしませう。この兒は何か持つて來ることが出来るでせうか？」

「ああ、この兒は出來るとも、」母は請合うけあつて、「この兒は今まで何程どれほど私に好いものを持つて來てくれたかわからないのよ。そして今度は息子をさ！ お前一體何處からヨセフを伴つれて來たの、レスリーや？」

「そりやあ私がお話しますよ、お母さん、子供には行つてもらつて、腸詰と葡萄酒一本と大きなバンとを買つて来て貰ひませう。」と言つてヨセフはレスリーに頼み、机の上に大きな貨幣を置きました。

「全塊のままのバン？」とレスリーはとても驚いてたづねました。ゾルゲンムツテルが一度に全塊のバンを手に入れることになつたなどとは、レスリーには殆んど信ぜられなかつたからです。そこで、彼女は雀躍して矢の様に跳び出し、信ぜられぬ程の速さで頼まれた品々を携つて來ました。

扨て、三人は打ち揃つて小さな食卓に就き、この小室で未だ嘗て催されたことのない饗宴を開いたわけでありました。母親のみは、欣びのあまり、御馳走も殆んど喉に通らない有様でした。そして、繰返し驚きながらたづねるのは、「ヨセフよ、それは本當にさうなのかね？」彼は、そのつど、嬉しそうに肯定くのでした。そして、レスリーに次から次へとバン片と腸詰を差出すのでした。彼女は「いゝえ、いゝえ、もう私澤山よ、ゾルゲンムツテルお婆さんにあげて

頂戴」と言ふのでした。彼は「おあがり、心配しなくていゝよ、お母さんほもう困ることはないんだよ、毎日大丈夫パンをさしあげられるんだから」と應へるのでした。

「さて、」と、ヨセフは長途の旅の疲勞^{つかれ}をすつかり癒したので、語り始めました。「さあお話しませう、お母さん、僕がどんなにして來たかを。僕がオーストラリヤへ送られることになつたことを御存じでしたね。でも島流しにされる恥辱^{はぢ}は享^うけたくなかつたし、留つてゐるわけにもゆかず、それで僕は逃亡したわけでした。僕は海を越えてイギリスへ渡りました。イギリスに住み込んだわけですが、その後の生活の資^{つぎ}がなかつたんです。あそこで辛い^{つら}日を送り、生きるためには辛い労働をしなければなりません。僕はそのために死んでしまふかとさへ思ひました。お母さん、僕はお母さんが僕のために祈り續けて居て下さつたと確く信じてゐます。僕が酷く慘^{みじ}めなことになる、邪^{わる}念^{ごんが}が起つて來たときには、いつも僕は突然、お母さんが御自分のお部屋で而も私の側^{そば}で聲

を揚げて祈つて居られるのを聞きました。神様が僕をいつか終に正しい道にお戻しにならうと思召すならば、神様が慘苦をみんなお母さん自身の上に負はせ給ふやうに、と祈つて居られるのを。僕はお母さんを眼のあたりに見たので、お母さんを墓に入れるやうな悪い事をする事が出来ませんでした。それで、僕は再た働き始めのでした。僕は機械工場に職場があつたのですが、段々暮せるやうになりました。お母さん、志さへあれば、人は九年もすれば何か出来るやうになれるものですね。で、僕も志を立てたのでした。それで、今はとにかく一廉の技術者になりましたよ。仕事は大丈夫見付かりますよ。ですから、お母さん、お暮しのことも御安心下さい。お母さんを『愛ひの母』と呼ぶ人は居なくなるでせう。御覽下さい、貯めて置いたものも持つて來ました！ ぢやあ、お母さんはどんなにお暮しだつたか話して下さい。」そこで、ヨセフは涙と汗の結晶である輝しい貨幣を食卓の上に置きました。母の感謝の増しゆくを見て、息子の心の喜びがその兩眼に溢れ輝くのでした。

「ああ、みんな正直に働いて獲たのだね、ヨセフ！ どう神様に感謝していいんだか知れないね。勿體ない程に思はれるの！」さう言つて、度しい母はいつもの様にその両手を組み合はせ、讚美と感謝の祈りを捧げるのでした。息子は、「お母さん、どんなにお暮しだったのか、さあ話して下さい、」と迫るのでした。

そこで、母は申しました、「ヨセフ、話すことはさう澤山はないよ。苦しい日と多くの憂悶が續いたの。で人々が私を憂ひの母と呼んだのも理由のないことではなかつたのです。でも、神様はいつも私を援け通して下さつたよ。けれども、去年になつて全く惨めな状態になり、體力もすつかり衰へたので、冬はもうもつまいと想はれたのさ。とその頃、天からの御使のやうに、この兒、ローゼンレスリーが現はれてね、私を再た強めてくれたんですよ。この冬中、そして今日此の日迄、レスリーは私を支へてくれたの。而もレスリーは度々自分のパンを私にくれて自分は空腹のままで居たことを私は知つてゐます。ところ

で私にたつた一つの心配があるんです、ヨセフ。それはね、レスリーは叔父さんのディートリッヒといふ人のところに住んでゐただけれど、そのディートリッヒが、明日家宅を棄てて出なければならないつてわけなの。それで、この兒は他人の手に渡される運命になつてゐるの。レスリーのこれからがどうなるか心配でね——」。

「何んですつて？ お母さん、お母さんを支持て來たこの兒が？」とヨセフは慌しく遮るやうに言ひました。「この兒のものの位充分ありますよ。この兒の生活のために人の援助は要りません。僕はディートリッヒのところへ行つて來ます。このローゼンレスリーを他人手に渡してなるものか！」——斯う言ひ終る間もなくヨセフは矢の様に扉口から出て行きました。

今しもレスリーは肱掛椅子から跳び降り、お婆さんの頸もとに抱きつき、歡びのあまり「ゾルゲンムツテル！　ゾルゲンムツテル！　さあ私お婆さんのところについてまでも居れるのね！　もうこのお家を出なくていいのね！」と呼ば

はり續けました。すると、母は兒を確つかり抱いて言ひました、「おおレスリーよ、私達は一體どう感謝したらいいんでせう！ 私達の一生涯を通して神様に感謝しても、それで充分といふことはないね。この事を生涯忘れないでね！ さあ、私の最後の心配も胸から除かれたね。これからは、もうお前さんも私をゾルゲンムッテルと呼ぶことはないね。もう本當にさうではなくなつたのだから。これからは、私はお前のお母さんになるからね。」

叔父のディートリッヒは、ヨセフからその意志を聞いたとき、喜びました。といふのも、彼はレスリーをひそかに不憫に思つてゐたからでした。彼はあの意地惡の道路夫にレスリーを渡すことは好まなかつたのです。けれども、彼としては翌朝早く立ち去らうとしてゐたので、さう遽かには別の方法を講ずるすべもなかつたのでした。それで、彼はヨセフに申しました。「あの兒を直ぐお引取りなさい。あの兒を今夜此處で眠らせては駄目ですよ。あれの可愛いベツトを直ぐ持つて行つて下さい。」彼は思つたのです、斯うして置けば萬事安全

だ、假令^{たとひ}道路夫が朝早くやつて來たところで、レスリーを伴れて行くことは出來まいと。ヨセフは非常に満足してデイトリッヒの手にお金を置きました。

この叔父がレスリーに對して決して悪意がなかつたことを、今直接に聞き知つたからでした。そこで、ヨセフはその小さなベットを、僅かばかりの雜品をくゝるめ込んで、肩にかつぎ、いそいそと運んで歸つて來ました。ベットは小部屋の中に運び込まれて、お母さんのベットの側に並べられました。斯うして、レスリーは、今や晝も夜もお母さんの許に居られるやうになつたので、言ひ盡し難い歡びを感じました。

ヨセフは、九年前に立ち去つた同じ場處に枕する處を見出したのです。母はその永い間毎日想つたのでした、「屹度彼は歸つてくるだらう、そして故里^{ふるさと}を見出すにちがひない」と。ヨセフは幸にも自分の故里を再び發見し、最早、再びどうあつてもこれを見捨てることのないことになりました。仕事も彼の希望通りに見付かりました。それも、彼が經驗に富んだ立派な技術者となつてゐた

からでありました。

毎朝ヨセフが仕事に出かけるときに、レスリーは彼の帽子に薔薇の花を一輪挿すのでした。このことはヨセフを特に喜ばせたばかりでなく、彼に仕事への本當の喜びを與へました。その界限の何處にもバラの花が見あたらない期ですら、彼はいつもの様に薔薇を挿んでゐました。それは、レスリーが最後の唯の一輪でもその在り場所を知つてゐましたし、それが誰の屬であつても手に入れ得たからでした。レスリーがゾルゲンムツテルを一年間も殆んど唯獨りで如何して支へたかといふ事實が廣く知られてからは、誰でもレスリーを以前よりずっと愛するやうになり、レスリーが姿を現はしさへすれば、庭の薔薇の花は提供されました。それが咲き初めのただの一輪であらうと、咲き残りのただの一華であらうとも。

斯うして、ヴィルドバツハの最も小さな家に最も幸福な三人が暮してゐました。ローゼンレスリーは、生涯ローゼンレスリー（薔薇のレスリー）と呼ばれたことでありませう。

あとがき

譯者がこの物語を読んで感じたことを少しく茲に附記させて戴きませう。

全篇に響る薔薇の花は美しいものでした。併しそれにもまして美しいのは薔薇の乙女レスリーの心でありました。ローゼンレスリーと呼ばれるまでに、ただ薔薇を愛した彼女のひたむきの心、その同じ心が「憂ひの母」に對する憫れみとなり、その同じ心が辻農婦に對する信義ある行ひとなつてゐました。レスリーの心がかく純であつたので、辻農婦はレスリーの「憂ひの母」に對する憫れみに氣づかず、「憂ひの母」すらもレスリーの空腹の幾夜かを充分には知らなかつたのでありました。

レスリーの純なる心はそれでは何處から來たのでせう。この物語は直接にはそのことを傳へて居りません。併しこの物語の琴線ともなつてゐるある一つのものに想ひあたる時、純なるものの由つて來たる源泉が窺はれると想はれます。それはゾルゲンムッテルの心に在る大切なもの、いのりから知られると想ひます。ゾルゲンムッテルは祈りの母でありました。彼

女の心をよく知らない婦人たちが「愛ひの母」といふ通稱を與へてしまつたのですが、彼女が實はベーンテムツテル（祈りの母）と呼ばれるべき婦人であつたことは、彼女の生き方からよく知られるところでせう。ヨセフは彼女の祈りによつて支へられたのであります。レスリーは彼女からお祈りといふものを教へられました。彼女自身はいのりによつて心の平安と力と希望とを與へられました。

いのりの力は偉大であります。いのりそのものは何にも力あるものではありませんが、神様は眞心から出たいのりを聽いて、力を現はして下さるからです。

レスリーは世の所謂孤兒でありました。彼女がかくも純にして美しき心を有つてゐたのは偶然のこととは考へられません。それが單なる道徳や教育から與へられるものとも思はれません。私は想ふのです、彼女を世に遺して死に別れた父または母の、おそらく兩親の絶えざる祈りが彼女をしてかく在らしめてゐるのであると。勿論彼女の兩親自身が純なる心の持ち主ではあつたでせう。しかもその純なるものは彼らが信仰生活を戰つてゐなかつたら保たれもせず、つねに新しく得ることも出来なかつたであらうものだと思ひます。

始めはおいのりを知らなかつたレスリーを支へてゐた天上の兩親の祈りを思ふとき、人生

の嚴肅味にぶつかる想ひがします。ゾルゲンムッテルから「お祈り」を教へられて、ヨセフのためその晩から祈り始めたあの單純なお祈りとそこにこもる眞心は神様の最も喜び給うたところでありませう。

斯く愛を生き、愛を祈つたレスリーの純なる心、それはまことに薔薇のかほりも恥らふものでありました。レスリー自身は愛も憐れみも自覺しないほど天眞でした。キリスト・イエスはかくの如き人に對して申されたのでせう、「幸なる哉、憐れみある者、その人は憐れみを得ん」と。實際彼女は、何も期待してゐなかつたのに、神様からその「憐れみ」を「得た」のでした。あの美しい夏の夕に。

いのりは神様への告白であります。これなくしては生きることの出來ない魂の呼吸であります。その極まるところは何らかの意味に於て深い愛であります。

「祈願」とか「默禱」とか言つて、淺薄な、形式的な、空疎な、或は功利打算的のすらある「祈り」しか知らない多くの日本人が本當の「いのり」とはどんなものであるかを知るに至る日に、わが國は菊の香よりも芳しき國となり、世界の平和の源泉となり得るでせう。

一九四六年一月三〇日

譯者

昭和廿一年十二月五日印刷
昭和廿一年十二月十日發行

薔薇の乙女

定價五圓

譯者 小池辰雄

發行者 長崎次郎
東京都麹町區飯田町二丁目七番地

印刷者 田中末吉
東京都世田區祖師ヶ谷三丁目一二二番地

版權
所有

發行所

東京都麹町區
飯田町二ノ七

株式會社新敎出版社

(振替東京九九九一番)
會員番號A一二九〇二二番

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給統制株式會社

大和印刷・青木製本

ヨハンナ・スビーリ原作

親子への物語集

小池辰雄譯

一 神はわが友

定價 二・五〇 送料 一・二〇

二 薔薇の乙女

定價 三・五〇 送料 一・二〇

三 レーザ家の一者^{ひと}

四 故里もなく

五 信賴の一途

別冊 スピーリの生涯

新教出版社刊行

